

京都及び附近ノ大地震

委員 理學博士 大森房吉

京都及び附近ニ關スル激震即チ破壞的地震ヲ列記スレバ左ノ如シ(大日本地震史料ニ依ル)

(一)天長四年七月十二日京都大ニ震ヒ舍屋多ク頽レ、餘震年ヲ越ユ 死傷ノ記事ナシ、地震ニ關シテ詔有リ

(西曆八百二十七年八月十一日)

(二)齊衡三年三月、地數々震フ京師及城南ノ屋舍佛塔傾毀シ餘震日ヲ涉ル

地震ニ關スル詔ナシ、非常ノ大地震ナラザリシガ如シ

(西曆八百五十六年四月)

(三)元慶四年十二月二日夜子時京都地大ニ震ヒ宮城ノ垣牆及び官廳民廬多ク頽損シ餘震日ヲ涉ル

死傷ノ記事ナシ

(西曆八百八十一年一月十三日)

(四)仁和三年七月三十日申時山城、攝津以下五畿内七道諸國地大ニ震フ、京都東西兩京ノ廬舍往々顛倒シ壓死セルモノ衆シ、沿海ノ潮水陸ニ漲リ溺死者多ク、就中攝津害ヲ被ルコト最モ甚シ、餘震日ヲ涉ル

(西曆八百八十七年八月二十六日)

(五)承平四年五月二十七日午刻地震シ京中所々築垣顛倒ス

(西曆九百三十四年七月十六日)

(六)天慶元年四月十五日戌刻京都地大ニ震ヒ宮城四面ノ垣多ク倒ル京中ノ屋舍顛倒シ垣牆悉ク破壞ス、内膳司ノ屋顛倒シ壓死者四人アリ、陰陽寮占シテ申ス、東西有兵亂事、云々……廿日加茂祭ヲ停ム内膳司人死穢ニ依ルナリ

餘震六月ニ至ル

承平八年五月二十二日天慶ト改元ス

(西曆九百三十八年五月二十二日)

(七)貞元元年六月十八日申刻山城近江二國地大ニ震ヒ、京都八省院、豐樂院、東寺、西寺、極樂寺、清水寺、圓覺寺等顛覆シ近江國分寺大門倒レ二王碎損ス、關寺大佛碎損シ、國府廳以下雜屋三十餘宇顛倒セリ、餘震連月止マズ

清水寺ニテ縋素壓死之者五十人アリ七月十二日貞元ト改元ス赦令有リ

(西曆九百七十六年七月二十二日)

(八)長久二年七月二十日丑刻京都地震、法成寺鐘樓顛倒ス

(西曆千〇四十一年八月二十五日)

(九)延久二年十月二十日丑刻山城大和兩國地震、京都ハ家々ノ

築垣ヲ損シ奈良東大寺ノ巨鐘ノ鐘鈕切落サル

(西曆千〇七十年十二月一日)

(十)寛治五年八月七日申刻山城大和兩國地震、法成寺ノ佛像、金峰山ノ金剛藏王寶殿等多ク毀損ス

(西曆千〇九十一年九月二十八日)

(十一)永長元年十一月二十四日辰刻京都奈良地強ク震ヒ、東大寺ノ巨鐘又落ツ、餘動日ヲ涉レリ

主上船ニ御サル、同二十八日於西殿下諸卿可有改元哉否事豫被僉議 十二月十五日依十一月二十四日大地震、被始方々御祈、東大寺千僧御讀經於大極殿被行如說仁王會……同十七日、左大臣以下參伏座定申改元(永長)江中納言擇申爲永長、又八盧以下被赦免、強竊ニ盜非赦限

(西曆千〇九十六年十二月十七日)

(十二)保延三年七月十五日申刻地震強シ餘震數日ニ涉ル

「強震」ナルベシ

(西曆千百三十七年八月十日)

(十三)治承元年十月二十七日丑刻奈良地強ク震ヒ「東大寺大佛螺髮二口落觀音前、又頂上螺髮拔上、又大鐘鈞切落大地、又印藏丑寅角頽落、是依敏覺三逆罪有怪異者」

(西曆千百七十七年十一月二十六日)

(十四)文治元年七月九日午刻大地震、山城、近江殊ニ甚シク、京都地或ハ折ケ或ハ陥リ、閑院ノ皇居、得長壽院、法勝寺ノ九重塔、阿彌陀堂、金堂、法成寺ノ廻廊等頽落シ、宇治橋墜落シ、近江ノ湖水大ニ減ジ、傍近ノ田、陷落シテ深淵トナリ、餘震九月ニ至ル

「美濃、伯耆等モ殊ノ外ノ震動ナリ、京中築垣ハ東西殊ニ壞ル南北面ハ頗ル殘ル云々二十一日山陵使ヲ立テラル」

「八月十三日、被立九社奉幣使、依地震御祈也、十四日有改元依地震也」

(西曆千百八十五年八月十三日)

(十五)文曆元年九月十六日寅刻京都地震ス、「占文不輕、兵革大喪云々」

十一月五日改元ス、天變地震ニ依ルナリ

(西曆千二百三十四年十月十七日)

(十六)嘉禎元年九月一日京都地震

九月十九日改元ス、天變地震ニ依ルナリ

(西曆千二百三十五年十月二十一日)

(十七)正中二年十月二十一日夜、近江、山城二國地震ス、竹生島及ビ荒地中山崩レタリ

正中三年四月二十六日、疾疫流行並去年ノ大地震ニ依リ改元アリ

(西曆千三百二十五年十二月五日)

(六) 正平五年五月二十三日申刻京都地強ク震ヒ祇園社石塔ノ九輪墜碎シ餘震月ヲ踰ユ

「七月十二日自仙洞(光嚴院)依地震被發遣山陵使、八月二十四日依地震事被行十社御讀經云」

(西曆千三百五十年七月六日)

(七) 正平十六年六月二十一日酉刻京都地大ニ震フ

同月二十二日卯刻地又大震フ、大和モ亦震フ

同月二十四日寅刻攝津、大和、紀伊、阿波、山城諸國地大ニ震ヒ攝津、阿波、海嘯アリ、攝津四天王寺ノ金堂顛倒ス、熊野社頭並ニ假殿以下三山岩屋以下秘書、秘木、秘石等悉破滅ス……河内國最甚シ阿波ノ雪湊ニテ民家一千七百餘宇引潮ニ連レテ海底ニ沈ム

(西曆千三百六十一年七月二十一日)

(八) 正平二十四年七月二十九日丑刻京都地強ク震ヒ東寺講堂傾ク

(西曆千三百六十九年九月七日)

(九) 應永三十二年十一月五日己刻京都強震アリ、築垣多ク損ズ

(西曆千四百二十五年十二月二十三日)

(十) 寶徳元年四月十二日辰刻山城、大和二國地大ニ震ヒ京都、

奈良多ク其害ヲ被リ餘震日ヲ涉ル

「嵯峨釋迦竝五大尊顛倒、神泉苑築地、東寺大門垣築地等破損、淀大橋三間落、桂橋二間落」

(西曆千四百四十九年五月十三日)

(十一) 文正元年四月六日酉刻京都強震、天滿社石燈籠顛倒糺御社石燈籠同顛倒云々

(西曆千四百六十六年五月二十九日)

(十二) 明應三年五月七日午刻大和國地大ニ震ヒ奈良東大寺、興福寺、藥師寺、法花寺、西大寺ノ諸寺及ビ矢田庄ノ民舍等多ク頽損シ、餘震十二月ニ及ブ 京都モ數々震フ 大佛ノ胸地震ニテ損ス

(西曆千四百九十四年六月十九日)

(十三) 天正十三年十一月二十九日夜半山城、大和、攝津、近江、美濃、尾張、伊勢、三河等ノ諸國大地震、瀕海ノ地ハ海嘯暴溢シ人畜死傷夥ク餘震年ヲ越ユ

「東寺講堂棟十間バカリエリ瓦崩ル大日不動般若菩薩頭口ヲチカ、リ、御手落……其外灌頂院悉破損シテ壁己下クツレ 其外坊ニ築地クツレ……」

(西曆千五百八十六年一月十八日)

(十四) 慶長元年閏七月十二日丑刻山城、攝津、和泉等諸國地大ニ

震ヒ、伏見城天守崩壞シテ上臈女房七十三人、中居下女ノ類五百餘人横死ス餘震歳ヲ越ユ

「京都在家顛倒、大佛事、堂無爲ナレドモ柱ヲ二寸程土へ入ル本尊大破、左御手崩落チ、御胸崩ル、其外所々裂罅アルモ御光ハ聊モ損セズ」

秀吉佛像ノ破壞セルヲ怒リ之ヲ射ル此ノ時沈惟敬ノ從者三十人モ堺ニテ壓死セリト云フ、京都上京ハ損害薄シ

(西曆千五百九十六年九月四日)

(廿)寛文二年五月一日午刻山城、大和、河内、和泉、攝津、丹波、若狹、近江、美濃、伊勢、駿河、三河、信濃等ノ諸國地大ニ震ヒ、人畜屋舎ノ被害極メテ夥シ、京都町屋總家數千軒潰レ、死人二百餘アリ、此日晝間五十六度夜四十七度震フ、京都大佛七尺傾キ、土裂ケ泥涌ク、祇園ノ石鳥居倒レ、五條石橋二十餘間落チ、伏見城山大ニ崩ル、宇治ノ御藏モ崩ル

(西曆千六百六十二年六月十六日)

(廿一)寛文三年十二月六日戌刻山城國地強ク震ヒ、京都二條城及ビ伏見ノ諸邸破損シ、洛中築垣所々崩レタリ

此ノ地震ハ「強震」ノ稍々強キ方ナルベシ

(西曆千六百六十四年一月四日)

(廿二)寛文五年五月十二日酉刻京都地震強ク、二條城石壁崩レニ

九御殿少シク破損ス

(西曆千六百六十五年六月二十五日)

(三)享保三年七月二十六日未ノ中刻信濃、三河、遠江、山城ノ諸國地震ス伏見領強ク震ヒ、淀城少々破損ス

(西曆千七百十八年八月二十二日)

(廿)天保元年七月二日申ノ刻太鼓打キル間モナク地震ス山城、攝津、丹波、丹後、近江、若狹ノ諸國地大ニ震ヒ就中京都被害夥シ、二條城石垣崩ル

所々ノ築地多ク倒ル、内裏仙洞ノ築地所々倒ル、平地モ所々七八寸位ニ割ル、怪我人千三百即死二百八十人アリ

京地ヨリ西北ニ當リ日々地響ス
北野天神社ノ石燈籠七十六本皆辰己ニ向ヒ倒ル、其外總テ辰己ニ向ヒ倒ル

(西曆千八百三十年八月十九日)

(廿)安政元年六月十五日丑刻山城、大和、河内、和泉、攝津、伊賀、伊勢、丹波、近江、越前、紀伊、尾張ノ諸國地大ニ震フ、就中伊賀、伊勢、大和夥シク災害ヲ被レリ

京都ハ格別ノ事ナシ

(西曆千八百五十四年七月九日)

上記セル三十二回ノ地震ノ年代ヲ一見スレバ、各年號ノ元年

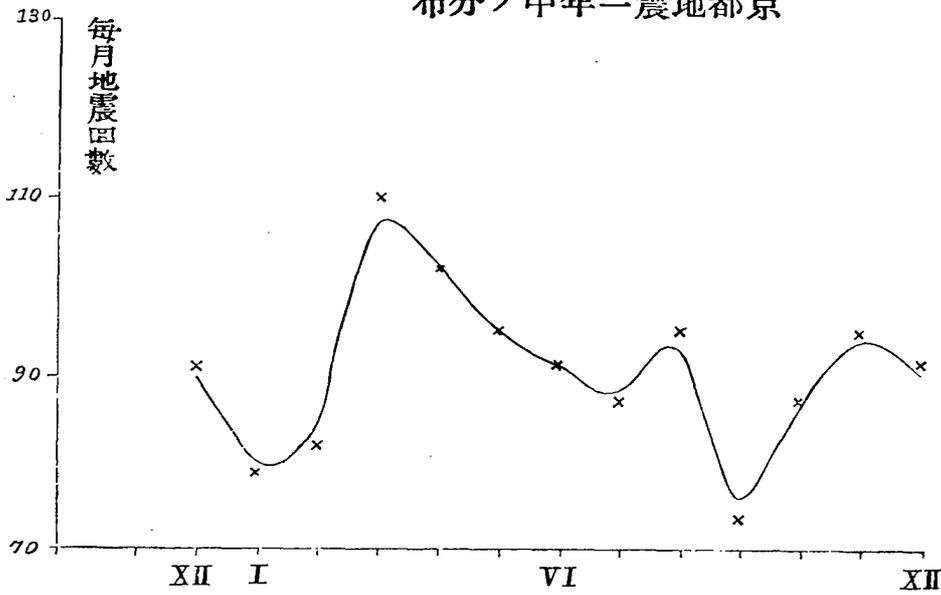
ニ地震アリシ事多ク天慶元年ヲ始メトシ十二回ニ及ヘルガ、

此等三十二回地震ヲ一年中十二ヶ月(太陽曆)ニ配布スレバ左

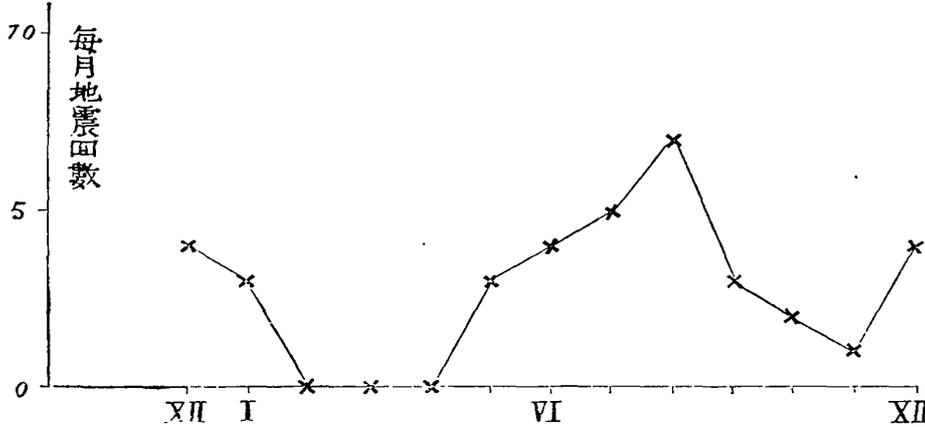
第一圖 小地震千八十八回

第二圖 激震三十二回

布分ノ中年一震地都京



布分ノ中年一震地都京



ノ如シ

月	地震
一月	三回
二月	〇
三月	〇
四月	〇
五月	三
六月	四
七月	五
八月	七
九月	三
十月	二
十一月	一
十二月	四

此ハ何レモ京都ニ地震アリシ爲ニ年號ヲ改メタルニ依ルナリ

回アリ、二月三月四月ノ三ヶ月間ニハ一回モ無カリキ、此等

即チ地震數ハ夏月ナル七月、八月ニ最多ニシテ五月ヨリ九月迄五ヶ月間ニ二十二回アリ、次ニ十月ヨリ一月迄ノ四ヶ月間ニ十

地震ノ回数ハ少ナクシテ充分ニ一年中分布ヲ論スルコトハ出來ザレドモ、試ニ圖解トシテ示セバ第二圖ノ如クニシテ、京都小地震ノ一年中ノ分布ヲ示ス第一圖ト比較スレバ互ニ殆ト正反對ノ關係ナルヲ見ルヘシ、就中小地震ハ三四兩月ニ最多ナルニ破壞的地震ハ二、三、四ノ三ヶ月ニハ皆無ナリ、此ハ偶然ニ非ズシテ、既ニ論ジタルガ如ク日本全國ノ破壞的地震ト普通小地震トガ一年中ノ分布ニ於テ正反對ナルト同一ノ理由ニ歸スヘキモノトス

京都及び附近ニ起レル破壞的地震三十二回ヲ地方別ニスレバ左ノ如シ

- (イ) 京都ガ震原ニ近カリシ地震 二十一回
 - (ロ) 近江、山城兩國ニ亘レル地震 三回
 - (ハ) 山城、大和兩國ノ地震 三回
 - (ニ) 山城、攝津等ノ地震 三回
 - (ホ) 奈良ノ地震 二回
- 又タ上記諸地震ノ際京都ニ於ケル震動ハ素ヨリ強弱ノ差アレバ今姑ク震害ノ輕重ニ從ヒ左ノ如ク甲、乙、丙ノ三種ニ區別スベシ
- (甲) 震害ノ甚シカリシ大地震
 - (乙) 家屋ノ損害築垣ノ損シ佛像ノ轉倒等ノコトアリタル

地震

(丙) 震害ガ格別ニ甚シカラズシテ多少石燈籠類ノ顛倒、築垣ノ破損等アリシ地震

(甲) 即チ大地震ト稱スベキハ京都ニ於テハ八回ニシテ前條ノ(イ)ニ屬スルモノ四回、(ロ)ニ屬スルモノ三回、(ニ)ニ屬スルモノ二回ナリ

三十二回地震ノ年代及び強サヲ左ニ列記シ、數年間ニ續キテ發起セル地震ハ一群ト見做シテ其ノ年代ヲ平均シ順次年數ノ差ヲ取レリ

一、西曆八百二十七年(甲)	年數ノ差	二十九
二、八百五十六年(丙)	二十八
三、八百八十一年(乙) 平均	五十二
四、八百八十七年(甲) 平均	四十三
五、九百三十四年(丙) 平均	六十五
六、九百三十八年(甲) 平均	二十四
七、九百七十六年(甲)
八、千〇四十一年(乙)
九、千〇七十年「奈良ニテハ(乙)」
十、千〇九十一年(乙) 平均
十一、千〇九十六年(乙) 平均

四十三

十二、千百三十七年(丙)

四十四年

十三、千百七十七年「奈良ニテハ(乙)」

千百八十一年

十四、千百八十五年(甲)

五十四年

十五、千二百三十四年(丙)

平均 千二百三十五年

十六、千二百三十五年(丙)

九十年

十七、千三百二十五年(乙)

三十五年

十八、千三百五十年(丙)

平均 千三百六十年

十九、千三百六十一年(丙)

六十五年

二十、千三百六十九年(丙)

二十四年

二十一、千四百二十五年(丙)

十七年

二十二、千四百四十九年(乙)

二十八

二十三、千四百六十六年(丙)

九十七年

二十四、千四百九十四年「奈良ニテハ(甲)」

平均 千五百九十一年

二十五、千五百八十六年(丙)

七十三

二十六、千五百九十六年(甲)

平均 千六百六十二年(甲)

二十七、千六百六十二年(甲)

平均 千六百六十四年

二十八、千六百六十四年(丙)

二十九、千六百六十五年(丙)

三十、千七百十八年(丙)

五十四年

三十一、千八百三十年(甲)

百十二年

三十二、千八百五十四年(丙)

二十四年

此ノ如ク京都及ビ附近ニテ、多少破壊的ナリシ地震ガ發起セ
ル時期順次ノ差ハ十七年ノコト一回、二十四年乃至三十五年
ノコト八回、四十年乃至七十二年ノコト九回、九十年乃至百
十二年ノコト三回ナレバ時トシテハ強キ地震ガ甚ダ稀ナルヲ
見ルベシ

京都ノ大地震

(甲)ノ種類即チ京都大地震ハ左記ノ八回ナ
リ

一、天長四年

西曆八二七年八月十一日

年數ノ差 六十年

四、仁和三年

八八七年八月廿六日

五十二年

六、天慶元年

九三八年五月廿二日

三十八年

七、貞元元年

九七六年七月廿二日

二百〇九年

八、文治元年

一〇八五年八月十三日

四百十一年

九、慶長元年

一五九六年九月四日

六百十六年

十、寛文二年

一六六二年六月十六日

六百六十八年

十一、天保元年

一八三〇年八月十九日

六百六十八年

八回ノ大震ヲ月別(太陽曆)ニスレバ五月廿二日乃至九月四日ニ起リ、他ノ月ニハ一回モ無カリキ左ノ如シ

五月	一回
六月	一回
七月	一回
八月	四回
九月	一回

此ノ如ク大震ハ八月ニハ最多ニシテ、四回アリ

又タ大震ノ起レル年代順次ノ差ハ初メ三回ハ三十八年乃至六十年ニシテ平均五十年トナレドモ爾後ハ長クシテ、二百年或ハ四百年以上トモ成レリ

(大地震平均年數ニ關スル報告ヲ參照スベシ)

京都大地震ト小震トノ關係 第三圖ニ十六世紀ヨリ十九世紀ノ始メニ至ル迄テ京都ニ於ケル毎十年間ノ小地震回數ノ變化ヲ示ス、點線ハ平均ノ位置ヲ通ジテ畫セルモノニシテ、其ノ大體ノ趨向ヲ見ルニ千四百九十年ヨリ千四百九十九年ノ間、千六百年ヨリ千六百九年ノ間、並ニ千七百五十年頃ニ最多ノ地震回數ヲ示シタルガ、(●)點ヲ以テ記セル如ク慶長元年、寛文二年、天保元年ノ大地震ハ此等ノ小震最多ノ時期ニ發セズシテ、却ツテ小震回數ガ最少トナリシ時期ノ直グ後ニ起リタ

ルハ江戸地震ノ場合ト同一ノ現象ニシテ、小震少ナキニ及ヘバ地下ニ迫壓ノ積加ヲ來タシテ遂ニ大地震ヲ發スルニ至ルモノナルヘシ



數回ノ間年十毎震地都京 圖三第
 (ス示ヲ係關ノト震大ト震小) ヲ至ニ紀世八十ヲヨ紀世六十
 ス示ヲ回一震地大.....●

